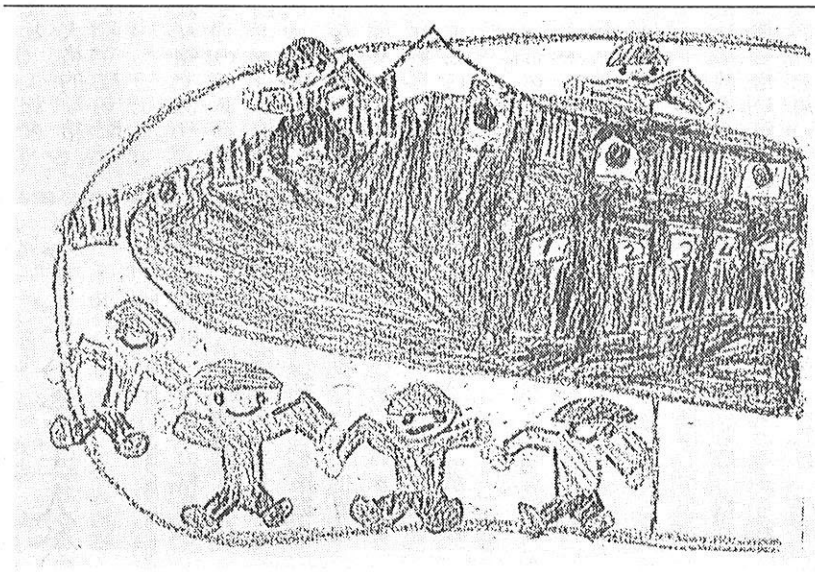
ひかりのこ　神に栄光を帰す　1990年10月31日　第 33 号

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替／東京3－128022
印刷／(株)ドモン企画

うんどうかい いっとうしょう！



2年　おおかわ　たかお

落ち穂拾い（レビ記十九章九節）

理事長　福島　勲

花を見て美しいと感じ、月を眺めて思いに耽る。心のさわやかな動きのもてない人は味気ない。

たわわに実る作物に、感謝する心を失っては、これまた心の貧しさをおぼえる。

自然のみのりに対する感謝は古くからなされた。聖書には麦の収穫にペンテコステの祭があり、葡萄の収穫に仮庵の祭が行われている。

世界の各国でも日時の違いはあるが、感謝祭を行っている。米国では、英国から渡ったピューリタンの人々の行った、十一月の第四木曜日を感謝日として守っている。日本のキリスト教会でもこれにならっている。

大嘗祭は天皇の即位後はじめての新なめ祭である。悠紀、主基田からとれた新穀物を神に捧げる。（民族学者によれば稲作に対する古い民間の習俗とか）

他人の祭儀式にとやかく言う筋合いはないが、天皇といえども国費を用いて宗教行事をされるとなると、憲法抵触問題がからんで論議を呼び起こす。

私どもとしては、スッキリした形で執り行われるよう、また、私どもの信じる天地の神への祭である日のくることを祈っている。

聖書には、落ち穂拾いの話がある。貧しい寡婦のため、わざとたくさんお落ち穂を残しておく（ルツ記）

また、木の実の全部とりつくさないで貧しい者、寄留者のために残しておくとある（レビ記）

今日のいう福祉制度であろうか。制度化された温かみのないものではなく、心と血の通うあり方での福祉である。

驚くべき経済成長を遂げた日本は、いろいろの形でこの恩恵のご恩返しを迫られている。

感謝の大袋のように気前よく配ればよい。言うまでもなく行き先が戦争につながることのないよう気を遣って。

落ち穂を落とす者と、これを拾う者との関係は、人格的な結びつきである。支配者や被支配者の関係ではない。

真心からの愛の贈り物であり、心からの感謝の頂きものである。

老齢化するわが国でさほど遠くない将来、三人で一人を支えていかなければならないという年金制度の状況だと聞く。

今に成人したどの年齢層の者かが、今の幼子らの世話にならなければならないのだ。

子どもを見る度に、この子らによって支えられる大人たちに、無関心ではおれないぞ、小さい魂に期待と感謝を捧げようと言いたい。

ミレーの落ち穂拾いの絵を見ながら、一本の落ち穂も拾い集める農夫らの苦心の心理を思いつつ、更に転じて故意に残していき、落とす者と、それを拾う者とが、共どもに首を垂れて、深い感謝の祈りを捧げる、といった絵にはなりそうにない絵を空想して、きびしい時代への希望としている。

子どもを主人公に

施設長　今関　公雄

国際連合は、「児童の権利に関する宣言」採択三〇周年記念日の一九八九年十一月二十日に、「子どもの権利条約」を採択しました。この条約には、世界の子どもたちみんなが、いきいきと生活し、希望に満ちた未来を持てるようにという願いが込められています。

条約は、世界の子どもたちを助け、保護する上で必要な権利や、子どもが一人の人間としての尊厳を持って生きていくための権利を総合的に保障しています。これまで、子どもは、権利を与えられる受け手と考えられていたのですが、条約は、子どもを自ら権利を行使する主体であるととらえています。［ユニセフ（国連児童基金）駐日代表事務所の資料による］

さて、養護施設では、条約の精神をどう考えたらよいであろうか。それは、事情により親と一緒に暮らし成長することのできない子どもたちが、あたかもわが家にいるごとく、安心と誇りを持って生活する主体者になることであります。端的にいえば、子どもが施設の主人公になることを意味しています。

このことは、理念的には異論のないところですが、最も悲劇的な場合には、施設内でリンチ殺害事件もあった現実を直視しなければなりません。養育に当たる者が、子どもに～してあげているといった施しの対象者としてみる虞があるからです。このことは子どもへの劣等処遇となり、主人公に職員や多くの場合、経営者がなってしまうことがしばしば見られるところです。

施設という一般に閉ざされた場面で表現力や具体的な力などの成熟していない子どもに関わる者には、相当の児童観と倫理性が求められる基本的な理由がここにあります。

相当の児童観の基本的な内容について、考察しておきたい。

第一に、養護施設に求められている機能の本質が、家庭に替わる場面で、家族に替わって子どもを養育するということにあります。本来の親や家庭で受けるべき養育の代替であります。子どもの将来への期待と激励、自らの精神的な継承をも願う親の心に、職員や経営者が立つならば、～してやっているなどの思い上がりが覚知され、乗り越える出発点となるであろう。

第二は、次代を担う国民としてとらえ直すことです。彼らのよりよい成長こそ、未来への希望ともいえるでしょう。

第三は、生活づくり、家づくりです。生活の主体である子どもと、職員が共に暮らしながら、主体的に生活を担うことです。

ここでは、予算の執行が家計簿で実行され、生活のプログラムが家を構成する者たちで立案され、実施されていきます。子どもも職員も生活の主体者になるための、さまざまな試行錯誤を繰り返しながら・・。

子どもを施設の主人公にしていくことは、当たり前のことですが、具体的には手間も暇もかかる実に重い課題なのです。

エッセイ

母のこと

県立高校教師　中島　睦雄

「サルビアがきれいね」と姉が言った。何でも、近所へ用事があったとかで、寄ったと言うことであった。家内がお茶をいれようとした。「英子さん、よいわよ、私がいれるから」と家内の動き出すのを遮り、いつもの調子でお茶をいれた。「お菓子はそこです」と家内もすっかりあてにして茶箪笥を指さした。

ひっそりした日曜日の午後である。久しぶりに家内と二人だけであった。そこへひょっこりと姉が自転車でやってきたのである。熱いお茶をすすりながら「早いものね、もう一年たつのね」と姉は言った。「あのころは夢中でしたね」と家内が言った。去年の一月に九〇歳を迎えた母は、それを少し過ぎた頃、もう全身的に弱ってしまって、自力では立ち上がることも容易ではなくなっていた。それと同時に思考や言語、行動などが次第にちぐはぐになってきた。とは言え、別に病気はないようであった。しかし、床に伏していることが多くなり、食事など、車付きの椅子で台所まで押してもらい、家族の中に入って食べるようになっていた。そのような状態が続いたが、そうなると、家族の各々がどのように母に接したらよいか、毎日のパターンも決まってきて、思ったほど骨は折れなかった。食事のし方、風呂のいれ方、トイレ、寝かせ方など、少しづつ改善を加えて、ある一定のリズムで流れていく。

私も風呂の係りを一手に引き受けていたが、母の体重が軽いこともあって、楽に入れることが出来た。母は、どちらかと言うと熱い風呂が好きだった。自分ではいることが出来た頃は、自在に温度の調節をしていたが、今度は私がその温度を決めることになると、どうしても用心して少しぬるめのお湯にしてしまう。それでも首までじっとお湯につかっている時に「ぬるくないかい」と聞くと「ああ、よいおゆだよ」と答えるのが常であった。しばらくして上がる頃には、母の体はすっかり赤くなって、充分温まったことが分かった。そこで体を洗ってやり合図をすれば、家内と娘が、バスタオルとシッカロールを持って待っている。私の仕事は一段落である。「おばあちゃんシッカロールを叩きます」よと娘が言えば「はい、はい」と、すべてを任せきって従っていた。

こんな調子で若葉の季節も過ぎ、梅雨に入った。私たちは母に風邪を引かせないように注意を払っていた。布団は重くなく、そして寒くないように。そこでそのような細々とした介護がし易いように、布団からベッドに変えても見た。確かにこの方が楽であった。毛布をかけてやりながら「おばあちゃん寒くないかい」と聞くと、いつも決まった答えが返ってきた。「寒くないよ、みんなは大丈夫かい」。

「みんなは大丈夫かい」母の言葉には、母の心遣いが良く表れていた。戦後の毎日は、夫に仕え、大勢の子どもたちを抱え、貧しい毎日だった。社会全体が貧しい時代だったが、家族がとにかく食べ、子どもには多少の教育をしなければならず、すべて自分のことよりも先ず「みんな」が大切だったのである。

夏が過ぎて、次第に母の体力が弱りつつあった頃には、もう食事が入らなくなってしまって、点滴のみの生活となった。そして、母の側にはいつも誰かが付き添っていた。近くに住んでいる私の兄弟たち、義兄たちも殆ど毎日やってきた。そのいぇ、母が最も信頼していたk先生が、連日往診にきて下さった。このk先生の存在は、私たち家族に絶大な安心感を与えていた。母の状態の起伏についても、k先生が診て下さる限り、それは厳然たる事実であった、誰もじたばたせず、その事実を受け入れることが出来た。母は、このように恵まれた状態で終末を迎えることが出来たのである。

母が息を引き取ったのは、一点の雲もない上天気の日であった。赤いサルビアや、金木犀が満開であったそのことがかえって、私たちにとっては一層悲しかった。

現場から

四季の彩り

竹下　由香

「『おめでとう』っていうだけでいいんだからね。」「いやだ。」「ほら、一緒に言ってあげるから。」「・・・・・・」「がんばって！」「・・・・」

かたくなに口を閉じ、眼からは大粒の涙が流れて・・・。

誕生会の一場面です。大勢の人から注目されることがとても苦手で、そうなると、全く言葉が出なくなってしまう亜季羅です。入所して二ヶ月、同じような場面が何度かありました。その都度、事前に、誰の前でも、どんな時でも、きちんと挨拶をしたり、自分の思いや意見を言うことの大切さを話をしたり、励ましたりしますがそれでも「言えないんだよ、嫌だよ。言いたくないんだよー。」と泣きながら訴えるのです。私には、それだけでどんなに＜嫌＞なのか充分に分かる気がします。

私も幼い頃から人前で何かをすると言うのはとても苦手で、そんな時はとにかく＜逃げたい＞と思いました。お願いだから、自分だけは勘弁して欲しいと思うのです。一大決心して、やっとの思いで、仕方なく立ち上がるのですが、その瞬間に、頭の中が真っ白になり、自分が何を言おうとしていたのかさえ分からなくなってしまいます。一生懸命がんばろうと思っているのに、どうしてなのか、そんな自分が腹立たしくて仕方がありませんでした。

何も言えなくなってしまう亜季羅を見ていると、そんな自分と二重写しに見えます。亜季羅の場合は、その嫌だという思いがもっと強いのでしょう。同じような経験と失敗を繰り返してきた私には何となく、亜季羅の言動が分かるような気がするのです。でも＜気持ちが分かる＞と言うことだけでは、何の解決にもなりません。＜だから、どうするのか＞そこで、いつも頭を抱えてしまいます。

幸か不幸か、ここには沢山の子どもと大人が生活していて、いろいろな行事もあります。家にいた頃よりも、注目される場面は多くなったでしょう。亜季羅にとっては、そんなことがここでの生活の一番の重荷になっているのです。それでも、最初は出来なかった他の子どもたちも、ごく当たり前にできるようになっているのです。亜季羅はまだここでの生活が浅いから、と思いながらも「絶対に嫌だ」と口を固く閉ざしている姿を見ると、本当に大丈夫なのだろうかと不安になります。

二テーブルに十人余りが食事をしますが、その食前の挨拶や感謝のお祈りを子どもたちが順番にやってくれています。どうしても「嫌だ」と言って亜季羅はやりません。順番を飛ばしながらでも長男の悟は偏らないようにしなければならないし、出来るようになって欲しいという思いもあって、亜季羅に促していました。そのうち、「嫌だ」と言うまでに少し時間をおくようになりました。自分もしようという表現なのでしょう。そして「嫌だ」は聞かれなくなってきました。しかし、みんなの励ましや促しがプレシャーに感じるようになってしまうのです。

大人は私だけで子どもは八人という珍しく小じんまりした夕食の時、長男の悟もいません。私が、「誰にやってもらおうかな・・」とみんなの顔を伺っていると、いつも、私、僕、と賑やかなのですが、誰よりも素早く、何と！「やりたい」と亜季羅が！。みんなのように上手くはなかったが「こんばんわ」からお祈りをしたのです！。高雄が「やった！」というと、やった、やったの合唱です。第一関門突破！亜季羅は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら、とても嬉しそうでした。

これからも、子どもたちは自分の眼の前に塞がる壁を自力で乗り越えるために努力していかなければなりません。

私がしなければならないのは「失敗してもいいから、がんばれ！」と励ましながら、それを「必ず出来る」と信じて見守ること。様々な課題に安心してトライ出来るような関係を創っていくことのように思いました。

☆プリズム

子どもたちの季節

仙道家

この夏、私を担当者にするため、ただそれだけの為に、岩崎保母から私に担当者を変更されてしまった悠子と詩美は、その大きな不安を背負い、暑い夏を乗り切った。今でも時折不安定さはあるが、日に日によくなる姉妹関係に、ホッと胸をなで下ろしている。

ある日突然現れた二歳半になった自分の妹。その行動は、二一歳の私にとっても？であったのに、五歳の悠子にとっては？？？だらけだったに違いない。詩美に関しては、他の誰でもなく、この私が何かやってあげるんだ！と強く思っている悠子である。その思いの強さが大きいだけ、自分以外の者が何かをしたり、自分が出来なかったりすると、悠子の心に残る不満や不安も大きいのだと思った。

何でもしてあげたい悠子と、何でも自分がしたい詩美。「いやーらー」妹の声が響く。「もう。詩美ちゃんは・・」姉のため息混じりの声も。姉妹が共に生活してから、そんな日々の半年が過ぎた。

お菓子が大好きなのに、「チョコレートをあげるから、お姉ちゃんを私に頂戴」と言うと、激しく首を振る詩美。何でも独り占めしたかったのに、何か良いことや楽しいことなどがあると「それ詩美ちゃんにも・・」と言うことの多くなった悠子。

毎日小さな事件を繰り返しながら、どんな関係が出来るのだろう。幼い頃、わがままでなき虫の私が、町内の子ども集団の仲間にいれてもらえなかったとき、一つ年上の姉は、「どうして妹を入れない！」と、がき大将のところへ走った。悠子もそんな姉に・・そして、そんな気持ちが分かる妹に詩美にはなって欲しいと願う。

詩美が生まれた時からその存在さえ知らないで、乳児院とここで育った姉妹。大きな隙間を埋め合わせ、姉妹が手と手をつなぎ、お互いの心になれる日が・・早く来い！。そのために私は何が出来るのだろう。姉妹に大きな不安や痛手をもたらして担当者になれた私。姉妹の受けたマイナスの埋め合わせさえ、まだ・・。五来　淑子

★プリズム

原田家日記

日曜日の夕食は自由献立です。三軒それぞれにメニューを考え作ります。十月七日。原田家は長女の晃子が食事を作ります。

午後、自転車で颯爽と、四キロ先のスーパーに買い物に行きました。車で行こうと言うと、「大丈夫、一人で行くから。」と、「私は一人で最後までやるわ。」とでも言いたそうな力強い口調でした。

六時頃、部屋にいるとプーンと美味しそうなカレーの香りが漂ってきました。小さな子どもたちが私に、「晃子ちゃんがカレーを作ってるんだよ、美味しそうだよ。」と嬉しそうです。晃子は中学校で家庭部に入っていて、料理、編み物、ぬいぐるみ作りと、中学一年の今から花嫁修行のようなことを毎日やっているだけのことはあって、家事などをやってもらうと、キラッと才能を光らせます。

「ごはんですよー。」の声で食卓につくと、カレーライスとサラダが並んでいました。一口頬張ると、予想していたよりはるかに美味しいではありませんか！一番小さい福子も「晃子ちゃんの作ったカレー美味しいわ」と何度も確かめるように言います。

晃子のカレーは大好評で、みんな競うようにオカワリをし、あっという間に、たくさんあったカレーは売り切れです。当の晃子は、余りにもみんなから誉められ、照れているのか、おしゃべりないつもと違い、何もなかったように無表情をよそおって食べていました。

学校を卒業すると、ここを出て一人で生活をして行かなければならない、ここの子どもにとって、掃除洗濯、食事作りから後かたづけなどは、大切な習慣にしておかなければなりません。それが毎日になると遊び盛りの子にはちょっと苦かも知れませんが。今日のようにみんなから誉められると自信になります。自信を積み重ね、いきいきと物事に取り組める晃子であって欲しいと思います。

今度は野菜炒めを作ってくれるそうです。原田家にまた一つ楽しみが加わりました。

檜山　真

虹の国から

ぼくは、あひるがかり

一年　なかや　たかお

ぼくは、あひるのせわをしています。
こやのそうじをしたり、えさをあげたり、いけのみずをとめたりします。
あさえさをやるとき、みずをだして、よるえさをやるときにみずをとめます。
あひるは、5わ、います。
はじめは、えさをやると、おすのくろあひるが、つっついたりおいかけてきました。
こわいからはしってえさをやりました。
いまはだいじょうぶです。
あるひ、しろくってちっちゃいあひるがびょうきになりました。
あるけなくてすわってました。
げんきがありませんでした。
おうちのひとが、どうぶつびょういんにつれていってくれました。
はいえんでしたが、つぎのひにはげんきになりました。
うれしかったです。
あひるのせわのなかで、そうじがたいへんです。
ごみをとることやいけをそうじすることがたいへんです。
でも、いえのひとにてつだってもらってきれいにします。
あひるもうれしそうです。
ぼくも、よかったとおもいます。

☆プリズム

まなざし……

佐藤家

その日は、幼稚園の運動会でした。珠弥ちゃんと照子さんは、お弁当を持って一日、幼稚園に行ってしまい、光代さんもお出かけしていました。十月十日は体育の日で、全国的に学校はお休みです。睦男君は剣道の試合、逸朗君は友だちとの約束で、それぞれ出かけ、雅志君と擢也君は珠弥ちゃんの応援に行きました。残ったのは、子ども五人に、それまで料理などしたことのない大人が一人。とにかく私たちで何とかお腹を満たさなければなりません。困ったな、今日はご飯食べられるかな、などと心配しているのは私だけで、子どもたちは、日頃隠しておいた腕前を見せる絶好の機会だと言わんばかりに張り切っています。

さて、私たちの腕前を慮って、照子さんが出かける前に考えてくれたメニューは焼きそば。これなら失敗しても何とか食べられるだろうとゆう、涙が出んばかりの配慮です。十一時になりました。まずは材料の買い出しです。みんなで近くのスーパーマーケットへ行き、照子さんの残してくれたメモを手がかりに、手分けをして買い物をします。ところが、豚のバラ肉の代わりに鳥の腿肉を持ってきたり、砂糖と書いてあれば角砂糖を買ってきてしまったりで、ずいぶん時間がかかってしまいました。家につくと、早速調理にとりかかりました。あらかじめ教わっておいた通りに、鍋に油を敷いてお肉と人参を炒めます。その間に光子ちゃんがキャベツを切るのですが、なかなか出来ず、そのうち人参はすっかり縮んでしまいます。「みっちゃん、早く早く」とあわてるのは麺を炒める係の鷹文です。潔が麺の上から水をかけますが、入れすぎてスープのようになってしまい、火力を強くして蒸発させようとします。大奮闘の末、出来上がった焼きそばは、いつも目にするものと形状こそ若干違っていましたが、味は紛れもなく焼きそばでした。・・美味しかったー

佐藤家に、自慢料理が、一つ増えました。　坂巻　直之

養護メモ 30

信じる——小林悟の場合（その二）

菅原　哲男

養護施設光の子どもの家は、生まれ育った劣悪な環境などによって、育つ力を発揮できない子どもたちが、伸び伸びと生活し、充分、成長出来るようになることを願ってたてられた。

どんな事情があったとしても、年若い、幼い子どもが、家庭から引き離され、親や家族と生活できないことを、どんなに説明されたとしても、了解し引き受けられる筈はない。泣きわめいて抵抗し、時には反社会的な行為をしてまで抗議をする。しかし、彼らの抵抗も、抗議も、その表現さえも受け入れられることなく、最も望まなかった、施設入所となるのである。

人は生まれて、食べることも、排泄も、動くこともひとりでは何もできない。それらの一切を依頼し、安心して寄りかかって成長していくなかで、親や家族に愛されることを経験し、信頼することを学習していく。

これが人の成長過程の基礎部分であり、人格の基底を形成しているのである。

現在在籍している子どもを産んでくれた親たちで、今も夫婦が一緒に生活しているのはたったの一組に過ぎない。このことから、彼らが安定した家族関係のなかで、安心して成長しなければならない、最もそれが必要な時期に、信頼よりは疑い、愛情よりは憎悪、優しさよりは乱暴が充満していて、共に暮らし合うことが不能に陥っていったものである。

どんな家族でも、いつも愛情に満ち満ちていて、笑顔ばかりとは言えないにしても・・。これはすさまじい現実といえる。

入所してすぐに抱っこやオンブを要求できる子どもは希であるが、暫くすると、四六時中それを要求するようになる。母親や家族に、抱かれるなどの経験の乏しいことと、一度経験すると飢餓状態だったそれを認知し、スキンシップの烈しい要求となってくるのである。それは、性別や年齢によって大差はない。

小林悟は4年生の時、妹と一緒にやってきた。

遊ぶものはプラスチックのロボット。保母が幼児に読んでやる「ノンタンシリーズ」の絵本が大好き。インテーク・ワークの竹花保母の細い膝に乗って、確かめるように顔や頭に触ってT・Vの幼児向けのお歌やアニメに見入っていた。入所して一週間もすると、園庭の枕木の舗道を、職員の誰彼なしにオンブしている姿がいつでも見られた。もちろん妹の晃子も同じである。

母が、定職を持たず酒を飲んでは喧嘩沙汰、窃盗や暴力行為で服役などの父との生活に耐えきれなくなって離婚し、下の幼い弟妹を連れて藤沢の実家に帰ってしまったのは、悟が小学校に上がって間もない頃だった。それから入所までの二年半に及ぶ間、世話する大人がいない家で、兄妹は生きてきた。

面倒を見てくれる親切な隣人もいたが、暴力的な父と近くに住む父の兄の存在は、そのような人々も疎遠にさせてしまったなどが、その後の母や地域への訪問などで明らかにされた。

結局、民生委員やヴォランタリーな近隣の人々、学校の教師などが細々と関わってくださっていたに過ぎない。当然生活全般への配慮は行き届かず、毎日の食事にも事欠き、食料品の窃盗などで命をつないだことも希ではなかったと、当時の警察の少年係は証言している。

家賃が溜まり、電灯も止められてしまった安アパートに、学齢に達したばかりの兄妹が、明日の食事の不安を抱え、身を寄せ合って生きていた状況は、想像さえも超えてしっまっている。

そんな中で、誰に甘えることも、依りかかることも出来ず、むしろ、大人は叱責し、追求し、彼らの眼には迫害する敵にさえ見えたに違いないのである。

みんながそうではないが細い身体の保母たちの誰彼に、大きな悟や晃子がオンブしている光景は、ある種異様でさえあった。

当時の反対運動による、地元からの入所児童の年齢制限の要請で、ここでは彼が最年長児であった。（この項続く）

日誌抄

八月一日～八月三一日

八月一日　久保さんよりヤクルトを、栗原さんよりいつものお励まし。ありがとう。

三日　栗橋町の竹林さんより行事を飾る花火を沢山。

六日　山口亜季羅（三年生）啓二（五歳）兄弟入所。生活に疲れた表情も痛々しく・・。

八日　夏期行事第三弾。東大宮教会C・S夏期学校。小学生全員が参加。炎暑の地から奥日光上智大学かつらぎ館へ。旧約聖書のヨセフ物語と戦場が原のハイキング。そして台風の襲来もの三日間。

○同日程で全国長老会第一五回中学生修養会に見子が参加。

十一日　夏期行事第四弾。この日から佐藤家の帰省できない子どものために、千葉正樹氏のご尽力で御殿場の駿東学園へ。晴れた日に遠望した日本一の富士登山とバーベキューの楽しい三日間。ありがとう！

十二日　夏期行事第五弾。仙道家の帰省できない子どものために、湯河原の海へ、府川勝臣ご夫妻と戸辺喜久雄ご夫妻、黛執氏、水谷敦子さんたちのお招き。波に戯れ、磯に蟹を追い、きらめくような美しい思い出をいっぱいの四日間。

○帰省できる子どもたちは、親に親族に手を引かれ、喜々として。竹花、秋元、倉沢、岩崎、各保母の実家にそれぞれ担当の子どもたちが・・お家の方々に大変お世話になりました。毎年毎年・・。感謝。

○　栗橋ボーイスカウトのみなさんより食品を沢山。感謝。

二二日　江森理容店主のご奉仕。とても暑い日で・・。感謝。

二四日　ピエロさんよりパンを。いつもありがとうございます。

二八日　夏期行事第六弾。GO GO会、奥秩父の難所両神山登頂をめざして。急きょ池田に代わって、歩くことには自信が・・と言う竹花保母が加わり総勢十名。四年生の四人が一年生の時から利用して、顔なじみの民宿「滝川」に一泊して、翌朝七時出発。九時登山開始、難所の連続で苦闘の末、足に自慢の竹花保母も登頂に成功。四時半無事下山。光の子どもの家に仲間意識と山の辛さと楽しさをどっさり持って十時三十分到着。

三十日　青山学院ＹＭＣＡ六名が草取りと土運びなど作業奉仕と子どもたちとゲームなど。

○加須市礼羽小学校の市川千代子先生来訪。創作折り紙のご指導とお励ましを。感謝。

○さよなら夏休み大パーティ。本紙に好評のエッセイをご執筆下さっている不動岡女子高校の中島睦雄先生もお迎えして。園庭に火を焚いてバーベキューを楽しみ、夏休みの自慢の報告と二学期への決意を。真っ黒に一回りも二回りも大きくなった子どもたちが胸をはって。最後は竹林さん提供の花火を・・。

☆　☆

こうして光の子たちの夏休みは終わりました。沢山の方々のお支えなしでは・・考えただけでもそれは不可能なことです。本紙と一緒に、お願いの便りを入れながら、いつも心にかかるのは、それだけの働きをしているだろうかという思いです。今後も心して励みます。（くら）

反射光

懸命に走り、歯を食いしばって跳び必死に演技して、確実にその限界を超えて拡大してみせる子どもたちの運動会も終わりました☆ついこの間始まったばかりの二学期も、もう半分過ぎて中間テストに備える中学生の窓の灯が遅くまで消えません☆塾の先生の真似ごとのような学習指導が仕事の大半である指導員と、生活の伴走者だと私が言ったその働きとのズレを坂巻を始め職員が悩んでいます☆子どもたちの学習水準は育つ障害の一つになっているほどです☆経済的にも能力的にも上級学校への進学の保障は発達保障の一つでもあるのです☆学習以前の状態での入所から数年間で彼らは追いつき競おうとしています☆生きることさえ不安だった状況からどう生きるかという状況への大きな変化を彼らは克ち取ろうとしています☆彼らに励まされながら真の意味での発達保障に全力を挙げなければと思わされています☆そんな遅々とした私たちの歩をこれからもお励ましお支え下さい。（哲）